

令和 5 年 6 月 13 日現在

機関番号：13201

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2016～2022

課題番号：16K02583

研究課題名（和文）先秦両漢の詩賦とその解釈の再検討 「南方エキゾチズム」の観点から

研究課題名（英文）A Reexamination of Pre-Qin and Han Shi-fu(Chinese Poetry and Prose Poem) and Their Interpretations: From the Perspective of "Southern Exoticism"

研究代表者

大野 圭介 (ONO, KEISUKE)

富山大学・学術研究部人文科学系・教授

研究者番号：30293278

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 2,400,000円

研究成果の概要（和文）：本研究では先秦時代の神話伝説における地域と描写叙述との関連について、古代中国における風景描写が開国神話などの物語に付随する形で始まったことを解明し、崑崙など神話上の地名が漢の武帝期以後現実の遠方の地名に当てられるようになったことが、文学における異景の描写に変化をもたらした可能性を論じた。

また『詩経』の漢代諸注釈への『楚辞』諸作品のイメージの影響について、『詩経』の注釈の分析を通じ、『詩経』と『楚辞』の解釈が互いに影響し合っていたことを解明した。さらに王逸『楚辞章句』における『詩経』の引用から、その編纂動機に楚辞文芸を経書並みの地位に高めようとしていたことがあったことを論じた。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究は中国古典文学におけるエキゾチズムの特質を解明しようとする研究の一部をなすものである。広大な国土を持つ中国は、冷涼な乾燥地帯である北方の黄河流域と、温暖湿潤で植生の豊かな南方の長江流域とで、古代から異なる文化が育ってきた。異なる風土や文化に対して抱かれるエキゾチズムが文学にどのように発露してきたかを知る上で、本研究の成果は大きな手がかりとなるものである。特に南方文学を代表する『楚辞』が、漢代において北方の人々に南方の神話世界を文学を通して「現実化」する役割も果たしたことは、その後の魏晋南北朝期の文学における南方の自然の描写について考える上でも大きな手がかりとなる成果である。

研究成果の概要（英文）： In this study, we examined the relationship between regions and descriptive narratives in myths and legends of the Pre-Qin Dynasty, and discussed the possibility that the application of mythical place names, such as Kunlun 崑崙, to real, distant places after the Wudi 武帝 period of the Han dynasty, may have changed the depiction of unusual landscapes in literature.

In addition, through the analysis of the commentary of Chuci 楚辞 in Shijing 詩経, it was clarified that the interpretation of Shijing and Chuci influenced each other in terms of the influence of the images of Chuci works on the various commentaries of Shijing in the Han Dynasty. Furthermore, based on the quotations from the Shijing in Wang Yi 王逸's Chuci Zhangju 楚辞章句, it was argued that the motive for its compilation was to elevate the Chuci literature and art to the status of a scripture.

研究分野：中国文学

キーワード：中国文学 神話 詩経 毛詩 古注 楚辞 エキゾチズム

1. 研究開始当初の背景

(1) 国内外の研究動向

先秦期のいわゆる「中原」で生まれた『詩経』に対し、南方の楚国で生まれた『楚辞』や『山海経』には北方中原の文献には見られない風物や神話伝説が豊富に描かれていることが、夙に南宋の朱熹によって指摘されている。現代においても小尾(1962)などに『楚辞』の自然観についての論考がある。また漢代に栄えた辞賦も岡村(1972)が指摘するように、漢初の江淮地方で栄えた『楚辞』系文学と陸賈ら北楚系文人の辞賦とが融合して、司馬相如らに代表される漢賦の作風が完成したと考えられている。

このように『楚辞』や漢代辞賦そのものについての研究には事欠かないが、『楚辞』が南方エキゾチシズムを代表する作品となりえた過程や要因については、国内・国外の諸研究ともほとんど触れられていない。高橋(2011)は『詩経』を「北方文学」、『楚辞』を「南方文学」と位置づけてその比較を行っているが、初歩的な分析にとどまっている。しかし同氏は辞賦の成立に戦国期の縦横家の弁論が影響している可能性も論じており、「北方文学」と「南方文学」が相互に影響し合っていた可能性を示唆しているのが注目される。同氏の論考は修辞面での考察にとどまる初歩的なものであるとはいえ、南方文学がエキゾチシズムを具えるに至るまでには、北方文学との相互作用は決して無視できない要因であろう。

(2) 応募者のこれまでの研究活動と立案に至った経緯

本研究応募者の大野は、先秦期の「南方文学」における神秘色に彩られた独自の描写が中国文学にもたらした影響について早くから関心を寄せており、『山海経』に見える神的世界や楽園の描写や表現が先秦兩漢の詩賦に影響した可能性を、論文「『愛に理想郷有り』 『山海経』と『穆天子伝』の『愛有』」(『興膳教授退官記念中国文学論集』、汲古書院、2000)や「蒼梧考」(『中国文学報』第68冊、2004)で論じてきた。2009年度から2011年度まで行った科研費・挑戦的萌芽研究「中国古典文学における異文化イメージの形成」は、それらをさらに普遍的なテーマへと発展させたものである。

中国先秦時代において、中原とは異なる独自の文化を持った南方の楚国に開花した『楚辞』文学や、これと類似する形式をもつ「楚歌」は、後世に中国の内なる異景としての南方へのエキゾチシズムをかき立てる詩歌形式となった。そうしたエキゾチシズムが生まれた淵源とその変容の過程を、『楚辞』を始め諸書に残る詩歌や、『山海経』とそれに続く空想的地理書を題材に精査した結果、『楚辞』自体がエキゾチシズムの産物なのではなく、秦漢統一王朝の出現や、漢代における辞賦文学や神仙思想の流行が、『楚辞』文学に内在する「異景」への覚醒を促す要因となったことを、当該研究によって明らかにした。

続いて2013年度から2015年度まで行った基盤研究(C)「漢魏六朝文学における「異景」描写の展開 辞賦から志怪書へ」において、辞賦は必ずしも南方文学の影響しか受けなかったわけではないし、先秦期の神話伝説もまた必ずしも南方のみを舞台にしたものではないにもかかわらず、特に南方のみにエキゾチックなイメージが付与された要因について、漢代の『楚辞』受容とは別に、先秦期の神話伝説自体の地域性、そして神話伝説の地としてのイメージがどう形成されたのかをさらに掘り下げて考える必要があると考えるに至った。

同基盤研究ではさらに、『詩経』の恋愛詩を求賢の詩と解する毛伝・鄭箋の解釈に、『楚辞』の諸作品が女性への思慕を明君への思慕にたとえていることの影響があることも明らかになった。女性の渡河がうたわれる『詩経』の作品のうち、漢水・江水など南方の川の名が見えている「漢広」には漢水の女神の神話と結びつける解釈が生まれたが、同じ主題をうたいながらありふれた植物である葍しか登場しない「蒹葭」にはそのような解釈が生まれなかった。『詩経』の漢代諸注釈に『楚辞』をはじめとする南方エキゾチシズムが影響した可能性を示唆するものである。

これらのテーマは中国古典文学におけるエキゾチシズムというテーマにおいて大いに考究に値する課題であり、この問題へ歩を進めて、前掲挑戦的萌芽研究・基盤研究での取り組みをさらに深化発展させるために立案したのが本研究である。

2. 研究の目的

本研究は『楚辞』『山海経』など楚国由来の文献の中原への伝来に伴って生じた「南方エキゾチシズム」が、漢代の辞賦作品、および『詩経』をはじめとする先秦時代の諸作品の解釈にどのように影響したかを解明することを目的とする。楚国をはじめとする「南方」の文化や文学そのものの研究は思想・文学・歴史・考古など各方面から行われているが、これが漢代の文学や学術にどう影響したかの研究はまだ十分には行われておらず、「南方エキゾチシズム」の観点の導入によって、その文学創作や作品解釈への影響、ひいては漢代という文化の一大転換点の特質を解明することを目指すものである。

3. 研究の方法

本研究は次の3項目を柱として行った。

- (1) 先秦期の諸文献に見える神話伝説について、その地域性を分析することにより、漢代において「南方」のエキゾチックなイメージが確立し、展開する過程を解明する。
- (2) 『詩経』毛伝・鄭箋等の漢代諸注釈を精査し、『楚辞』諸作品のイメージがどう影響しているかを解明する。
- (3) 両漢期の詩文や辞賦における「南方」イメージを精査することにより、漢代における「南方」イメージがどう展開し、その後の文学にどう影響したかを探る。

4. 研究成果

(1) 先秦時代の神話伝説における地域と描写叙述との関連について、まず論文「『詩経』における情景描写の変遷——大雅の開国叙事詩を中心に」(2016)を発表した。これは『詩経』大雅や周頌に見える、周の先王をうたった詩における景物描写の変化を分析し、純粋に先王を祝頌する詩には見えない風景描写が、開国神話をうたった詩に初めて現れ、古代中国における風景描写が物語に付随する形で始まったことを解明したものである。

続いて口頭発表「神山の変容——崑崙山の描写を中心に」(2016)で、それまでは俗世を離れて遊行する場所であった崑崙山の描写が、漢の武帝以後現実の天子の狩場や宮殿を称える辞賦作品にも登場するようになったことを中心に、その変質を論じた。武帝による北方・西方諸国への遠征や南越国の併呑によって、崑崙や蒼梧など神話上の地名が現実の遠方の地名に当てられたことが、文学における異景というシンボルにも変化をもたらした可能性を示唆するものであり、神話世界の「現実化」が文学におけるエキゾチシズム産生のファクターとして機能し得ることを示せたことは大きい。上記口頭発表をもとにした論文「詩語「崑崙」の誕生」(2018)では、これらに加えて戦国期の中原の諸文献における崑崙山は遠方に関する地理知識の一環として紹介されるのみであるのに対し、南方の楚国の諸文献における崑崙山は神山としてのさまざまな神話伝説とともに記されることにも言及している。

さらに「舜の「南風歌」をめぐって」と題する口頭発表(2017。2023年度中に論文として発表予定)で、舜の作と伝えられてきた「南風歌」と同様の形式である「滄浪歌」が、『楚辞章句』で独立した作品として収められている「漁父」に含まれることから、楚辞文芸の復興を目指していた王逸が楚北民謡の「滄浪歌」を含む形での民間伝承を利用して、「滄浪歌」の代わりに「懐沙」を含む『史記』屈原列伝のように改変された屈原物語を本来の形に戻そうとした可能性を指摘している。本発表は先秦の『尸子』以来、三国魏の王肅の編とされてきた『孔子家語』に至るまで文献に歌詞が見えない「南風歌」が楚北地域に脈々と伝承されていた可能性を論ずるものでもあり、埋もれた地域神話が文学の伝承に影響を及ぼしていることを示唆する。

なお論文「『山海経』から『白沢図』へ」(2017)でも、地理を知悉する神としての禹の伝説が、漢代の淮南から呉越のかけての地域で根強く信仰されていたことに言及している。

(2) 『詩経』の漢代諸注釈への『楚辞』諸作品のイメージの影響について、まず口頭発表「論《詩経》古注的恋愛詩解釈」(2018)で、『詩経』王風「采葛」は上海博物館楚簡『孔子詩論』が妻を愛する心情を歌うものと解しているのに対し、時代が下る毛伝・鄭箋が讒言を恐れる臣下が明君を待つ詩と解することについて、天上の女神に理解を求めようとする心情を忠臣が明君を求めめる心情に重ねる『楚辞』離騷の解釈がこれに影響した可能性を論じたものである。

また口頭発表「王逸《九思》考」(2017)及びこれをもとにした論文「王逸『九思』考」(2018)で、後漢初期の王逸『楚辞章句』の末尾に収められる王逸自身の楚辞体作品「九思」を分析し、王逸が「九思」の中に『詩経』特有の表現をも盛り込むことによって、辞賦に押されて衰退しつつあった楚辞文芸を経書並みの地位に高めて復興しようとしていたことを明らかにした。

さらに口頭発表「論王逸引《詩》」(2019)及びこれをもとに改稿した論文「王逸『楚辞章句』の引詩について」で、王逸が自身の作品に『詩経』の句を用いただけではなく、『楚辞』の章句にも『詩経』を他書よりも遥かに大量に引用しており、この点からも辞賦に押されて衰退しつつあった楚辞文芸を経書並みの地位に高めようとする意図が認められることを論じた。

(3) 漢代における「南方」イメージの展開とその後の文学への影響について、上記論文「王逸『楚辞章句』の引詩について」で、王逸が『楚辞』諸作品を『詩経』と同等の「経」の地位を与えようとしたことが、結果的に楚辞文芸の「経」としての固定化をもたらした、その表現や精神は他の文学ジャンルに継承されて変化発展していったことを論じた。

また口頭発表「『山海経』與『穆天子傳』——從傳世文獻與出土文獻的角度看」(2021)及びこれをもとに改稿した論文「『山海経』の書名について——「山海」を中心に」(2023年8月発表予定)で、楚地の神話伝説を色濃く反映しているとされてきた『山海経』について、書名の「山海」という語がもとは戦国期の齊の思想を反映した『管子』に説かれる経済政策に特有の術語であり、漢初までに楚にも広まっていた可能性が高いことを明らかにした。さらに漢の武帝期までに『山海経』が世に出るのと軌を一にして、「山海」に「辺遠の山と海」の意味が加わり、魏晉に至って詩語として用いられるようになったことも論じている。

(4) 「3. 研究の方法」に当初掲げた3項目のうち、新型コロナ禍の影響もあって十分な解明

に至らなかったものもあるが、以上の研究成果から、『楚辞』をはじめとする南方文学が北方にもたらされたことが「神話の現実化」を促し、文学における南方エキゾチズムを産む契機となった可能性を見いだせたことは最も大きな成果といえよう。南北朝期になると、北方の貴族が大挙して南方に避難し、文学の中心が南方に移ったことにより、文学上のエキゾチックなシンボルでしかなかった南方の神話世界が、今度は現実のものとして眼前に展開することになった。『楚辞』から受け継がれた南方文学の精神や表現が、彼らの文学にどう影響したかについての研究は、2021年度から開始した科研費基盤研究(C)「魏晋南北朝期における『楚辞』文学の変容と影響 楚歌・屈原イメージ・遊行」で発展的に継承つつ進行している。

引用文献

小尾郊一、中国文学に現われた自然と自然観、岩波書店、1962

岡村繁、漢初における辞賦文学の動向、『鳥居久靖先生華甲記念論集』、同記念会、1972、pp.47-72

高橋庸一郎、中国文化史上における漢賦の役割、晃洋書房、2011

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計6件（うち査読付論文 2件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 6件）

1. 著者名 大野圭介	4. 巻 79
2. 論文標題 『山海経』の書名について 「山海」を中心に	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 富山大学人文科学研究	6. 最初と最後の頁 -
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 大野圭介	4. 巻 77
2. 論文標題 王逸『楚辞章句』における引詩について	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 富山大学人文科学研究	6. 最初と最後の頁 288-273
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 大野圭介	4. 巻 90
2. 論文標題 詩語「崑崙」の誕生	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 中国文学報	6. 最初と最後の頁 1-43
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 大野圭介	4. 巻 70
2. 論文標題 王逸「九思」考	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 富山大学人文学部紀要	6. 最初と最後の頁 380-402
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 大野圭介	4. 巻 68
2. 論文標題 『山海経』から『白沢図』へ	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 富山大学人文学部紀要	6. 最初と最後の頁 327-346
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.15099/00018266	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 大野圭介	4. 巻 65
2. 論文標題 『詩経』における情景描写の変遷 大雅の開国叙事詩を中心に	5. 発行年 2016年
3. 雑誌名 富山大学人文学部紀要	6. 最初と最後の頁 329-348
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.15099/00016255	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

[学会発表] 計7件(うち招待講演 1件/うち国際学会 4件)

1. 発表者名 大野圭介
2. 発表標題 『山海経』と『穆天子傳』 從傳世文獻與出土文獻の角度看
3. 学会等名 第二屆早期中國經典研究學術研討會(國際学会)
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 大野圭介
2. 発表標題 論王逸引《詩》
3. 学会等名 2019年楚辭國際學術研討會暨中國屈原学会第18屆年會(國際学会)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 大野圭介
2. 発表標題 論《詩經》古注的恋愛詩解釈
3. 学会等名 第13屆詩經國際學術研討會（國際學會）
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 大野圭介
2. 発表標題 舜の「南風歌」をめぐって
3. 学会等名 桃の会2017年9月例会
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 大野圭介
2. 発表標題 王逸《九思》考
3. 学会等名 2017年楚辭國際學術研討會暨中國屈原學會第17屆年會（國際學會）
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 大野圭介
2. 発表標題 神山の変容 崑崙山の描写を中心に
3. 学会等名 京都大学中国文学会第31回例会（招待講演）
4. 発表年 2016年

1. 発表者名 大野圭介
2. 発表標題 『山海経』から『白沢図』へ あるいは漢魏における黄帝と禹
3. 学会等名 日本中国学会第68回大会
4. 発表年 2016年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

大野 圭介 (Researchmap) https://researchmap.jp/g-daye/
--

6. 研究組織			
	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------